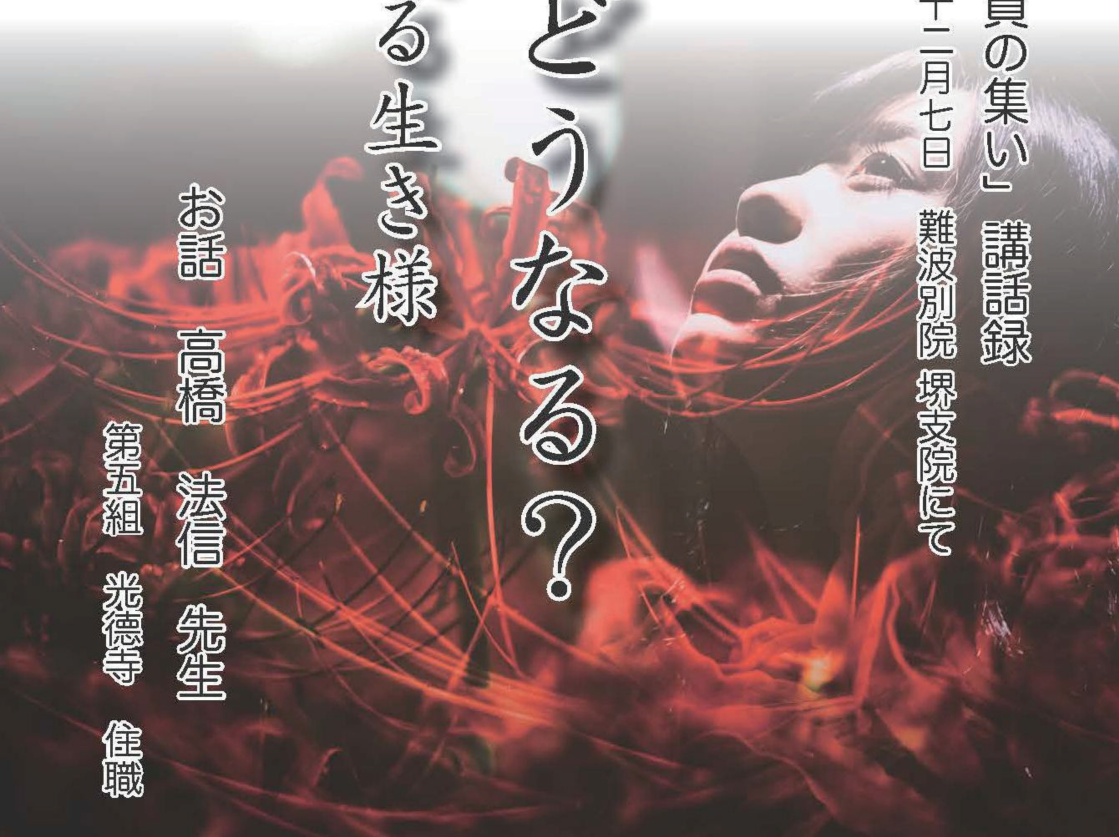
第二十一組　第三回「推進員の集い」講話録

二〇一六年十二月七日　難波別院 堺支院にて

死んだらどうなる？

問われる生き様



お話　高橋 法信 先生

第五組　光徳寺　住職

三帰依文

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を発さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

それでは御一緒に三帰依文を唱和いたします。

三帰依文　唱和

はじめに

皆さんこんにちは。大阪市生野区から今日は寄せていただきました。地下鉄の小路（しょうじ）駅という駅の正面です。地下鉄の階段上がったら徒歩で五歩です。五分違いますよ、階段上がって、ばたっと倒れたら手が届くようなところにお寺があります。朝は向って右隣の喫茶店からコーヒーのいい香りが入ってきます。夕方は左隣の焼き鳥屋からいい匂いが入ってきます。私はそんなところで光徳寺（こうとくじ）というお寺をお預かりしてるのです。

さて、この「死んだらどうなる」というテーマを考えるには、まず「生まれた」ということと、「生きる」ということの確かめが必要でないかと思っております。

私には、もう二児のパパになった長男がいます。孫は女の子二人です。孫は可愛いいですね。そのパパになった息子がね、まだ小学校四年生のときに「お父さん死ぬのか」と聞くのですよ。びっくりした。私も自分が死ぬって忘れていました。「お父さん死ぬの、お父さん死んだら嫌や」と言って泣くのですよ。うれしかったねえ。最近は言わないけどね。

それから、「お父さん、僕も死ぬのか？」「僕、死ぬの嫌や、死ななあかんのやったら生まれてこなかった方が良かったわ」と言って泣くのです。「何で生まれてきたの、何のために生きているの」と、幼い時の感性って凄いですね。親鸞聖人も九歳の時に、こんな生（しょう）死（じ）の問題を大きな課題として生きられたのでしょう。

息子に、「それはなあ」ってこう言いかけたのですけど、「はて」と言葉が続かないのです。どうしてかと言いましたらね、分かったこととして済ましてきたことが自分の中にあったのだと思います。「こういうものだ」というような答えを持って、その持った答えに縛られて、がんじがらめになっていたということに気がつかされたのです。子どもの問いが教えてくれたのです。

思いが引っかかる

それから「人間はいったい何を求めて生きているんやろ」と書いて、掲示板に張ってみたのです。そしたら不思議なことにたくさんの人が立ち止まるのです。女子高生も、パチプロのおっちゃんもみんな立ち止まる。そう、年のころやったら八十過ぎのお婆ちゃんも立ち止まる。でも、みんな立ち止まってじっと掲示板見て、異口同音に「わからんわ」と

言って立ち去って行くのです

しかし、不思議なのは立ち止まることができるということです。「何を求めて生きているんやろ」という言葉は、人を立ち止まらせる力があるのですよ。こう問われれば、私たちは日頃の心を思い返します。つまり、自分の思い通りになることが好きで、思い通りにならないことが嫌いという思いです。その思いにがんじがらめになっていることすら気が付かないで、一生懸命に思い通りになることを願って生きているのが我々凡夫（ぼんぶ）でしょ。

でも、それで全部ではないという思いがどっかにある。「本当にこれでいいのだろうか」という思いが引っかかるのです。だから立ち止まるのです。

どこからそういう思いは起こってくるのでしょうね。女子高生も、パチプロのおっちゃんも、また八十過ぎのお婆さんもみなそういう経験をしておられるのだと思うのです。私は、そこに何か大事なものが蠢（うごめ）いているように思うのです。

生まれ難い身

この『宗祖親鸞聖人』という赤いテキストは、これから大谷派の住職になろうとする人たちが、本山で研修を受ける際に用いられるものです。でも、これは決して特別な人のた

めの特別なテキストではなくて、私たちの同朋会でもこのテキストを用いております。

この中の「人身受け難し」ということを紹介した所を読みます。

法語　今日道場の諸衆等、恒沙曠劫よりすべて経来れり。この人身を度るに値遇しがたし。たとえば優曇華の始めて開くがごとし。

（『教行信証』行巻・法照「五会法事讃」）

文意　今日道場に集まった人たちはかぎりない求道の時をへめぐって、いまここまできたのである。よく考えてみると、この身をうけることは、まことにまことに出会いがたいことである。たとえば優曇華の花がはじめて咲くのをみるようである。

『宗祖親鸞聖人』（東本願寺出版部・教学研究所編）九頁

優曇華の花というのはね、三千年に一回咲くのですって。ですからそれほどこの身を受けるということは得難いことである。それを私なんかは日頃生まれることが当たり前で死ぬことが他人事だと思っていますが、そうじゃないって言うのです。この身を受けるということが大変なことなのです。そこに意味を見出されたのが仏教の大事な教えでしょう。

そして死は必然ですね。だからこそ、この人生をどう生きようかということを次の法語

に表現されてあります。

法語　ああ夢幻にして真にあらず、寿夭にして保ちがたし。呼吸の頃に、すなわちこれ来生なり。一たび人身を失いつれば、万劫にも復せず。この時悟らずは、仏もし衆生をいかがしたまわん。願わくは深く無常を念じて、いたずらに後悔を貽すことなかれ。

（『教行信証』行巻・宗暁「楽邦文類」）

文意　ああ、人の世は夢幻であって、まことでない。いのちはかなくて、いつまでも留めることはできない。ひといきの間にこの世は過ぎ去ってしまうのである。ひとたびこの身を失えば、永遠にかえってくることはない。今ここにおいてさとらなければ、仏もまたなすすべもない。願わくば、人生の無常を深く心に留めて、悔いなきいのちを生きてほしい。

『宗祖親鸞聖人』（東本願寺出版部・教学研究所編）八頁

生まれ難い身として生まれて来たけれども、必ずこの身には終わりが来る。そして一度死ねば、もう二度と戻ることはできない。だから、私たちに悔いのない人生を送って欲しいと仏様は願っておられるのですね。

しかし、よくよく考えてみますと、私たち自身の奥の方からも「悔いのない人生を生きたい。」という、深い叫びのようなものがこみあげて来ていませんか。

宗教という言葉

いったい、日頃私たち人間は何を求めて生きているのかを、ちょっと考えてみましょうか。

少し前、日本の人口が一億二千万ほどの時代の話ですが、その時に宗教を持っている人は二億一千万と言われていました。つまり、一人で複数の宗教を持っている方がいるということですね。それから当時、「あなたにとって大切なものは何でしょうか」という新聞アンケートもありました。その結果、第一番が健康です。第二番が家族仲良く。第三番は財産お金です。そうやって順番に発表されたのですが、出てこない言葉がありました。それは宗教です。宗教が最後まで出てきませんでした。人口よりも、宗教を持っている人の方が多いという結果があるのに、宗教という言葉が出てこないのです。どうでしょう、これは私たち日本人のもつ宗教観が原因かもしれません。

先日、一泊旅行で善光寺にお参りに行きました。その時に善光寺のお坊さんが旗をもっ

てガイド役をしてくれました。暗い所に入って行って鍵さわるところがあるでしょ、そのすぐそばでお坊さんがいろいろ説明してくれるのです。「ここでは毎日護摩焚き（ごまた）が行われております。」ってね。で、偉いお坊さんが焚いた護摩と、普通のお坊さんの焚いた護摩では、値打ちが違うっていうのですね。それから「この偉いお坊さんが護摩焚いたお札を家に持って帰って、御仏壇のご先祖に供えてくださいね。そしたら、『わしが死んでみんな横向いとるけども、お前は違った。偉い奴や、よっしゃ何でも言うこと聞いたろ。健康か、家族仲良くか、お金か、何でも叶えるぞ』ってなりますよ。」って言うのですよ。私ちょっと唖然としたのですが、もしかしたら、私たちが宗教に求めものはこういうものじゃないですかね。神仏に、自分が良いと感じる思いを叶えてもらうことを宗教と言っているのじゃないですか。

次の世代に

もう五年ほど前に、ある新聞社の人と清め塩についての対談をしました。その時に、ある学生から聞いたことを思い出したんです。友達二人でお伊勢さんにお参りした時に、こんな会話があったというのです。

「あれ、お前とこのお婆さんこないだ亡くなったのと違うか」
「亡くなったよ」
「そしたら、参ったらアカンやんか」
「何で参ったらアカンの」
「死者の出た家はケガレてるやろ。ケガレた者が聖なる神社に参拝したらケガレるやろ」
という内容です。
これ、一方の学生が、「死はケガレ」ということを誰かから教えてもらったのでしょ。こういうことが、ずっと知らず知らずのうちに隣のおっちゃんやったり、あるいは親戚のおばちゃんやったり、そういう身近な人から伝えられてきたのです。
私たちは何を求め、何を次の世代に伝えて行くのかということを、しっかり考えないとダメだと改めて思うことです。

良しだけを求める心

例えば、霊感商法というのがあります。霊感商法で騙される人は、最初から持たされた「お守り」を信じているわけではないのです。「お守りを持ちなさい」と言われたけれど持

たなかった時に、たまたま病気や事故を起こすと「ああ、お守りをもたなかったからだ」と考えてしまうようになるのですね。逆に、お守りを持っていて何も起こらなかったら「守ってくださったから何事もなかったのだ」と考えるようになってしまうのです。これに一旦はまってしまいますとなかなか抜けられない。

これは、良し悪しの「良し」だけを求める心です。「良し」が叶うことに御利益がある。ここに祟（たた）る霊と守る霊が生まれます。自分の心を中心にして良し悪しで分けますから、そらもう、祟ると守るできちんと分けられます。何故こういう話をするのかといいますと、私たちは亡くなった人を霊として扱ってしまうことがあるからです。ないでしょうかね、日頃の心が、私たちの身内で亡くなった大切な人を、知らず知らずのうちに霊にしてしまう。そしてその霊が守ってくれたり、祟ってきたりするわけです。

なぜ法事をつとめるの

これは、もう何年前ですかね、CS放送（スカイA）で「東本願寺　心の時間」という番組があったのです。そのときに「なぜ法事をするのか」というテーマの番組に出演しました。「なぜご法事をつとめるのですか?」って、会場にマイクをふりますとね、「それはしっか

りと法事のときに供養しとかんとあとで祟ってくるからや」とか「しっかり供養しといたら守ってくれるからや」という言葉が出て来たのですよ。それから、ちょっと質問を変えまして「お経は誰のためにあるのでしょうか？」って、それを司会の大谷昌子（おおたにまさこ）さんに振ったんです。そしたら「えっ、台本にないよ」という顔をされて「それはやっぱり亡くなった人のためにお経はあるんでしょ。だから供養っていうのでしょ。」っていう答えが帰って来ました。しかし本当にそうでしょうか。亡き人を思う前に亡き人から思われているのは私たちじゃないでしょうか。

お爺ちゃんの風邪薬

あるお宅の七回忌の法事に寄せてもらいましたら位牌が置いてありました。それで、その位牌の前に小さな薬の袋が置いてあったのです。法事の時はだいたい好きだった物をお供えするでしょ。うちの父親は甘党だったからおはぎ供えたりします。私には多分、芋焼酎を供えてくれると思います。それがね、この時は町医者の薬が供えてあったのです。

いえ、供えてあるなんて思ってないから、「こんなとこに薬置いてあるで」とお婆ちゃんに声かけたら、「いや、置いてあるのじゃないのです。供えてあるのです。」って返って来

ました。思わず「ええ？お爺ちゃん変わった物好きやったんやな。薬好きやったの」と尋ねたのです。

そしたら、「いえいえ、これには深い訳がある」と続きました。法事の準備で、布施の近商というスーパーに買い物に行ったら、何でもないとこでカタっと転んだんですって。そんなこと今までなかったから、これはきっと死んだお爺ちゃんが何か言おうとしているに違いがないと思ったそうです。

そういえば、昔ミヤコ蝶々さんやったかな、お墓の宣伝してましたね。「お父ちゃんが迷ってる、えらいこっちゃお父ちゃんの家たてなアカン。」みたいに言ってね。ああやってテレビがお説教するのです。それで聞いたらみんなその気になってしまう。それがまた新しい日本人の宗教観というものを作っていくのですね。

さて、しばらくしたら今度は孫さんが自転車の後輪に足巻き込まれて大怪我したのです。きっとこれも死んだお爺ちゃんが何か言おうとしているに違いがないとこうなった。もう、こうなってしまうと中々抜けられないです。とうとう仏間で寝ていたら、夜中にお爺ちゃんが「おい」って写真から出てきたのですって。もう布団かぶって「なんまんだ、なんまんだ」とお念仏称えることしかできなかったそうです。

いや、好きで一緒になったお爺ちゃんだから「久しぶりねえ」くらい言うたらいいのに

と言ったら、「出る時が悪いって」って言ってましたわ。
それで、あんまり怖いから亡くなった方の霊と話しができる人の所に行ったのですって。いったい、亡くなった人とどうやって喋るのか不思議ですが、とにかくしばらくブツブツ言っていたと思ったら「わかった！　今、あなたのお爺さんは風邪ひいて苦しんでる。早く風邪を治してあげないと、行くとこ行かれない」と、こう言われたらしいです。
それで「ああ、そうか」と、お婆ちゃん町医者に行って
「風邪薬を欲しい」って、言うたら
「じゃあお婆ちゃん熱計りましょ」って言われるから
「私やない」と答える。でも、
「はい、口開けて」とお医者さん。
「いや、私やない」ともう一度答えたら、
「じゃあ、誰なの」と聞かれる。
「お爺ちゃん」と、答えたら、
「お爺ちゃん死んだんやろう、どうして風邪薬がいるの」って、それで
「いや、実は出てきて困る」って、答えたら、お医者さん小さな薬の袋を出してくれたのですって。で、それが位牌の前にお供えしてあったのです。

法事にはね、足を怪我した孫さんも一緒にいました。それで「この薬、効かなかったらどうなるんやろ」って話したら、「いいことがある。この位牌を病院に持って行って注射打ってもらったらいい」という話になったのです。

もう、おかしくてね、法事のおつとめができないのです。始めようとするのですけど、三回ほどやり直させてくださいってお願いしました。私だけやないのです。みんなクスクス、クスクス笑うものだから釣られてまた笑ってしまいます。なんとかご法事が終わって、「始まる前にこういう話があったけれど、皆さんはどうでしょうか」ってお尋ねしたら「私はそこまでしません」「どこまでするの」と聞いたら、「私は冷え性が治るように、熱いお茶をお内仏さんに供えるくらいですわ。」っておっしゃるのです。

まあ、切ないものもありますけれど、それが本当に宗教といえるものかどうかを確かめないといけないのです。大切な人から祟られないように法事をつとめる、あるいは自分の願いを叶えてもらうというのが、本当に宗教なのでしょうか。

外を問題にしている自分

また、先祖供養についてはこんなことがありました。昔、仏教テレホン相談室というボ

ランティアをやっていました。当番で座っていましたら、女性から「しっかりと先祖供養やってくれるお寺を紹介してください」という電話がありました。それで、「もし良かったら訳を教えてください」と聞くと、「うちの息子は一部上場の会社で営業をしています。営業成績もいいし、スポーツマンだし、なかなかのイケメンです。」っておっしゃるのです。母親が息子をイケメンだってよく言うなと思ったのですが、続いて「その息子が、お見合いを三十回近くもしているのですけど、どうもうまくいきません。兄嫁が言うには先祖供養してないのが問題のようです。だから、しっかりと先祖供養してくれるお寺を探していますす。先祖供養しっかりしてもらったら、きっと結婚もうまく行くと思うのです。」と答えられました。

私は重ねて「もし良かったら息子さんの好みも聞かせてください」と聞いたのです。そうしたら「あまり背の高い子でなくて、かといってあまり低い子でなく、手の大きい子でもなく、料理が好きで、きれい好きで、温厚で物わかりがよくて気配りができて、」と、どんどん出て来ます。ちょっと呆れて黙って聞いてましたら、そのうち突然笑い出されましてね、しばらく笑ってから「これは無理ですね。」って、すっきりされて電話切られました。

いつでも問題を自分の外のせいにするのが私達の癖です。外を問題にして自分の思いを遂げようとしているのです。その自分の姿になかなか気がつかないのです。何が悪かった

のかと思い悩む時、方角が悪かったと言ってみたり、日が悪かったと言ってみたりします。たとえば方角には鬼門ということがありますが、あれは中国で生まれた言葉です。収穫が終わった頃に北東の方角から馬賊が来るのです。食料を全部奪って逃げていくわけです。秦の始皇帝の時代に、この馬賊の侵入を防ぐためにできたのが万里の長城です。ですから、日本で北東が鬼門といっても意味がないのです。しかし鬼門といわれると、鬼門封じをしたくなるのが人間なのです。

こうやって、すべて外を問題にしている自分の姿に、気がつくかどうかが大切なことではないでしょうか。

表面の姿しか見ていなかった

私たちは何を求めて生きているかを確かめてきましたが、一つは、今言いましたように自分の思い通りになること、つまり良し悪しの「良し」だけが自分の人生になることを求めるような生き方です。

もう一つは、「良し」だけを求めるのが全てだろうか?本当にこれでいいのだろうかという問いを持つ生き方です。私たちは、こういう確かな生き方を求めておるのではないかと

思うのです。

今年で浄土へ還って三年目になります友達がいます。その友達と始めて会ったのは教師修練のスタッフでした。亡くなるときから三十年前ですね。ずっと一緒にやってきたのです。胃がんで亡くなる一年前はうちの定例法話に元気で来ていました。焼酎をストレートで飲むので「おまえ大丈夫か、横に水でも置いて飲まなあかんで」と言っていたものです。

八月三日に亡くなりましたが、六月二十三日が最後の定例法話でした。その定例の前の六月六日にお見舞いを兼ねて様子を見に行ったのです。顔は腫れ上がってアンパンマンみたいになっているし、手足も腫れ上がっていました。尿が出ないのですね。一所懸命に利尿剤使っているのですが、どうも今の様子では難しいなと思って「今回は養生してちょっとでもマシになってから来てくれたらいいよ」と言ったら、怒ったのです。寡黙な男が「俺はちゃんと死を見つめている、俺は癌で死ぬのと違う。生まれたから死ぬのや。だから一つ一つやり残しのないように生きたいと、今、思っているのだ。それをおまえは来るなと言うのか。」と言って、怒ったのです。

私は彼の表面の姿だけしか見てなかったのですね。その心意気といいますか、「人生やり残しのないように生きたい」という心の底までは見ていなかったのです。すぐに、「ああ僕が考え違いをしていた。待っているから来てください。」と改めて定例法話の講師とし

てお願いしました。

姫路の山奥から来てくれました。塩田温泉があるところです。一人では来られないから坊守さんと一緒に来てくれたのです。その時のテーマは「いのちの荘厳（しょうごん）」です。荘厳というのは飾り付けるという意味があります。浄土の荘厳という言葉がありますね、親鸞聖人が作られた『高僧和讃』に出てきます。「安養浄土（あんにょうじょうど）の荘厳は　唯仏与仏（ゆいぶつよぶつ）の知見なり　究竟（くきょう）せること虚空（こくう）にして　広大にして辺際（へんざい）なし」

（『高僧和讃』真宗聖典　四九〇頁）

その日は「お互いに念仏申しあって、その命を輝かせましょう」と彼の遺言のような話になりました。

願いを次の者に

それから、彼が最後に思っていたのは、九月にある、年に一回のハンセン病の人達の交流集会です。会場は東京です。最後に、そこに行きたいと思っていたようですが八月三日に亡くなります。

身には限界がありますね。では彼がどうしたかといいますと、頭がボケるからと痛み止めを打たずに若い住職を呼んだのです。自分の息子も一緒に呼びました。そこで「私はハ

ンセン病の人との出遇いによって、ああなったら終わりだと思っていた自分が見えてきた。そこから、その人達と共に生きるという生き方がある、ひとりひとりが命輝やかせていく生き方があるのだと気がつかせてもらった。どうか自分の後を継いで東京のハンセン病の人達の交流集会に行ってくれ」と言ったそうです。この身には限界があっても、自分の願いを次の者に伝えていくという大きな仕事が残っていたのですね。

こうやって考えてみますと、私達は死んだらどうなるのかという前に、どう生きるのかということが大きな課題としてあるのではないでしょうか。これをお浄土に帰った友達から教えてもらいました。彼は今浄土に還って、いつも穢土における私たちを見守ってくれていることかと思います。

花びらは散っても花は散らない

今日は資料も用意して来ました。大阪教区の教化センター通信をお借りしてきました。ちょっと読みます。

問　死んだらどこへ行くのでしょうか。

答　人間死んだらゴミになるといった人もありますが一般によく聞くことは大地に還ると言われます。確かに目に見える部分つまり肉体は火葬すれば骨と灰になり、埋めれば土になります。これは間違いの無い事実でありましょうが、かけがえのない身内の人が亡くなってはたしてそれですむでしょうか。

「トンボつり今日はどこまでいったやら」という歌があります。幼い子どもを亡くした母親が子どもを思う心、心情が歌われています。亡くなった子はもはや帰ってこないことは頭ではわかっていても夕方になると、「今日はまだ帰ってこないなあ」と子どもに思いを馳せる、やるせない情が響いてくるようです。人が死んだら灰になり土になることは違いないでしょうが他人のことならともかくも身内や自分の事となると「死んだらしまい」ではどうしても納得できません。やはり人間死んだらどうなるのかという問いが残ります。「花びらは散っても花は散らない、人は去っても面影は去らない」と金子大榮先生はおっしゃいました。桜の花はパット咲いてパット散ります。花びらは散ってしまっても、しかし「美しかったなあ」と言う花の印象は心に留まります。姿形はなくなっても亡くなっていかれた人の言葉や生きざまは残された人々の心に留まります。お釈迦さまや親鸞聖人のお言葉や生きざまが今日を生きる私達の拠り所となるのもそのことであります。

恵信尼さんからの手紙

これを読むと思い出す事があります。親鸞聖人が十一月の二十八日に亡くなられますと、末娘の覚信尼さんが十二月一日にお母さんの恵信尼さんに手紙を出すのですね。

そこには「お母さん、お父さんの往生は本当に間違いないでしょうか。法然様が亡くなられた時のことを、お父さん（親鸞聖人）は、『光輝く空の中に紫の雲がたなびき、心地よい雅楽が聞こえてきて、何とも言えないかぐわしい香りがしてきた。』と浄土へ正しく還られる姿として教えてくれました。（本師源空のおわりには　光明紫雲のごとくなり　音楽哀婉雅亮にて　異香みぎりに暎芳す　『高僧和讃』真宗聖典　四九九頁）ところがお父さんの時には何も不思議な事が起きませんでした。ただ一人の人として死んでいったのです。本当に大丈夫でしょうか」という、内容が書かれてありました。

やがて、お母さんの恵信尼さんから返事が届きます。まず、十二月二十日にお手紙が確かに届いたということ、続いて「なによりもお父様（親鸞聖人）は間違いなく往生なさっています。大事なことは死に様ではなくて、お父様の生き様なのですよ」ということが書いてあります。

また、後半部分には「私も今年で八十二歳になります。これが私の遺言になるでしょう」

とありますが、その直前に紹介されるのが、従来は「女犯偈」、今は「行者宿報偈」と呼ばれる親鸞聖人が賜った夢のお告げです。

本文　行者宿報設女犯　我成玉女身被犯　一生之間能荘厳　臨終引導生極楽

書き下し　行者宿報にてたとい女犯すとも、我玉女の身となりて犯せられん。一生の間能く荘厳して、臨終に引導して極楽に生ぜしむ

『御伝鈔』真宗聖典　七二五頁

呼び方によって内容も変わります。「女犯」という言葉から、「犯―被犯」という言葉へと、視点が変化したのです。「犯―被犯」とは、「差別するもの―差別されるもの」「支配するもの―支配されるもの」「踏みつけるもの―踏みつけられるもの」「犠牲を強いるもの―犠牲にされるもの」「切り捨てるもの―切り捨てられるもの」という、宿報としての人間関係を課題として一生を生きなさいというお母さんの遺言と言えるでしょう。

そして「この『文』を字の上手な人に書いてもらい、一生身につけてあなたの人生の課題としなさい」と手紙の中に出てきます。

やはりそこからは、「死に様ではなくお父様の生き様を尋ねなさい。それがあなたの人生

を導いていくのです」とお手紙のやりとりの中で確認できることです。

お念仏を申す身となるか否か

もう少し資料を読みます。

金子大榮先生にある人が尋ねました。「死んだ祖先はどこに行かれたんですか。死んだら無になってしまうのですか。」この問に対し先生は「死んだらお浄土に還ってゆかれます。そして常に働いておられます。いつどこで働いておられるのか。私が手を合わせて拝むとき、拝まれるものとなって、拝む人の上に現れます」と仰せになりました。

ちょっと資料に手書きで言葉を付け加えました。「生きてるときは身を運ばな会われへんけど、命終したら南無阿弥陀仏になるんや。せやから念仏申したときにいつでも会える」という私の母の言葉です。続けて読みます。

「拝まれるもの」は仏さまです。そういう意味では亡くなった人は「諸仏（しょぶつ）」となって私達を護持養育してくださっているのです。いわば浄土に本籍をもって穢土に現に有縁の人々を救済されつつあるのでしょう。問題は私自身が真に拝む身（お念仏を申す身）となるか否かであります。亡くなられた方を「仏」とすることができるかどうかは、これをご縁に私自身が聞法を聞き、救われていく確かな人生の歩みが始まるかどうかでありましょう。

今日は座談会が設けられるということであります。「こう聞いたからこう」というのでは生きた出遇いにはなかなかなりませんし、むしろ忌憚なく日頃思っていることを出すことによって確かめ合う、そういう座談会になっていただけたらと思います。

合掌

ここで終わらせていただきます。

本書は、2016年12月7日に難波別院堺支院（堺南御坊）で開催された「第3回　第21組 推進員の集い」の高橋法信先生のお話を加筆訂正したものです。

この「推進員の集い」を開催するにあたり、当検討会の推進員と住職で何度も打ち合わせを行いました。

その結果、素朴でありながら、やはり一番気になる「死んだらどうなる」という講題で先生からお話をいただきました。

先生は、楽しくそして力強く、多くの方との出会いを通したお話をされました。特に、お子様が素朴に死を考えたことから始まった「生まれたこと・生きることへの問いかけ」が全編を貫いています。

そこで、この問いかけをより多くの方々と共有することを願い本書にまとめました。また、先生と相談し「問われる生き様」という副題もつけさせていただきました。

最後になりましたが、本書の発行を御快諾いただきました高橋法信先生に深甚の謝意を申し上げます。

2017年10月1日

推進員の活動に関する検討会

死んだらどうなる？　問われる生き様

２０１７年１０月１日　初版発行

講　　述　　高橋　法信
発行編集　　大阪教区第２１組教化委員会
　　　　　　「推進員の活動に関する検討会」
　　　　　　事務局　〒593-8312
　　　　　　　　　　堺市西区草部７９
　　　　　　　　　　真宗大谷派大阪教区第２１組以速寺
組版・デザイン　Tatsumaro Yamao

高橋（たかはし）　法信（ほうしん）　師

1952 年生まれ

大阪教区第 5 組光徳寺　住職

第 21 組　第 3 期推進員養成講座講師

同朋会館教導・教師修練指導等を歴任

ラジオ東本願寺の時間に出演

難波別院定例法話講師 ほか

真宗大谷派　大阪教区第 21 組教化委員会
推進員の活動に関する検討会